

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

研究題目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サントゥールとピアノのアンサンブルによる新たな可能性の追求</li> <li>・西洋／東洋の価値の接触 相違／融和点の探求</li> </ul>	報告書作成者	川合清裕
研究従事者	内海恵 川合清裕		
研究目的	<p>西洋音楽とペルシャ音楽。この両者が音楽的、思想的にいかにか融和可能か。</p> <p>藝術が「体系の藝術」となって久しい。無論、あらゆるものに体系が付いて回るということは重々承知してはいる。西洋音楽の特性上、作曲家、演奏家が高度に理性化しなければ、一定の再現性を確保できないということもまた事実である。</p> <p>しかし、西洋藝術世界が理性的完全性を追求するあまり、切り捨てたものの重大さ 一言い換えれば、理性的思考の働きによる合理化、定式化が招く表現の画一化＝貧困化、これについて考えてみると、ただ流行に身を任せることに危機感のようなものを感じずにはいられない。</p> <p>(尤も、西洋音楽のトップコンポーザー、トッププレイヤーたちは、その極まった理性のうちで、今現在も見事なニュアンスを生み出し続けている。この点はいくら強調してもしすぎることはないだろう。)</p> <p>この研究は、はじめ、新たな音世界の創造を目的として始まった。そのことに疑いはない。</p> <p>しかし、研究を進めるうちにもう一つの側面、つまりこの危機意識の提言、共有こそが、音楽創造と同等の価値を有するのではないか、という考えに至った。音楽界の末席に名を連ねるものとして、分不相応は十分自認しつつ、これからも発信する努力を続けたいと思う。</p> <p>将来的にこれらの考えが若気の至りであったと思える日が来るならば、それはそれで微笑ましいことではないか。西洋音楽の道程に間違いがなかったのだから。あるいは、西洋的進歩史観を思ってみれば、そろそろ次のアンチテーゼが必要な時期なのかもしれない。いずれにせよ、我々はこの取り組みに、相当の充実を感じていることは間違いない。</p>		

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

研究内容	<p>① ペルシヤ的伝統(旋法、微分音、即興、装飾技法、etc.)を踏まえたサントウルとピアノのための新曲の創作</p> <p>② イラン人作曲家(ペルシヤ系音楽を専門とする作曲家)による 20 世紀以降の作品の発掘と発表</p> <p>③ 西洋音楽作曲家による、ペルシヤ音楽に触発されて作曲された作品の発掘と発表</p> <p>④ イラン古典詩の朗読とのコラボレーション</p> <p>これらを達成する上で、ペルシヤ及びヨーロッパ中世の思想、音楽を学習することは必須である。</p>
------	--

研究概要報告書(中間報告)【音楽振興部門(コラボ部門)】

( / )

<p>研究のポイント</p>	<p>理性／野性 人工／自然 秩序(cosmos)／混沌(chaos) etc.          研究のポイントを簡略化すれば、これら二項対立にいかに向き合うかということになるだろう。          西洋においてこれらの思想上の対立は想像以上に鋭い。脱構築的な理論を駆使したところで所詮は机上の空論であろうし、仮に二項の境界を有耶無耶にできたところで問題は依然として解決しない。          他方、東洋的な、世界の完全性を「一」として捉える思想にとっては、そもそも対立自体が存在しない。          この姿勢も、我々の目指すべき音楽の指針にはなりえようが、そっくりそのまま答えとして掲げることはできない。先にも少し述べたように、西洋音楽の基本的な性質は、理性の関与抜きには語りえないだろうし、さらにこの世界の完全性の側から見れば、人間の営みはそれ自体が余計な変数となってしまうことだろう。          やはり両者の融和こそ、求められるものであるのだろう。このジレンマをどのように消化／昇華するか。          西洋の文脈が排除してきた価値に今一度光を当てる、というのも一つの方法であろう。身体性、即興性、象徴体系はそれぞれが重要なテーマとなりえる。          あるいは、マニエラとしての理性。通常理性による体系化は一種の漂白作用であると我々は考えるが、マニエリスムはその逆をゆく、遊びとしての理性、藝術である。</p>
<p>研究結果 (中間報告)</p>	<p><b>【演奏会】</b>          2020/6/28(日) ペルシャデュオコンサート ～ペルシャ音楽と象徴～ 小論付き演奏会          拙論「神秘・象徴・驚異のもの ～ランボーとその周辺～」</p> <p>開催延期演奏会          2020/4/26(日)第2回サントゥールとピアノコンサート「ホマユーン」          2020/7/26(日)第3回サントゥールとピアノコンサート</p> <p><b>【作曲】</b>          ホマユーンのためのエレジー 改訂版          サントゥールとピアノのための小品 改訂完全版</p>

<p>今後の課題</p>	<p>コロナウイルスの影響で、実現した演奏会はたったの1度だけで、それ以外の企画は全てキャンセルとなってしまった。</p> <p>今尚先行き不透明な状況ではあるが、オンラインなどを駆使し、より幅広く活動してゆくことが今後の一番の課題と言えるだろう。</p> <p>直近では「ペルシャデュオコンサート ～薔薇とナイチンゲール～」という、花鳥の象徴体系にスポットを当てた演奏会を開催予定だ。この演奏会では、中東音楽、西洋音楽にとどまらず、スペインやロシアの音楽にもアプローチしているし、演奏される楽曲の時代も、中世から近代のものまで幅広い。「薔薇」というテーマも大変興味深く、有意義なイベントとなることだろう。</p> <p>以下、より具体的な課題について。</p> <p>まず、演奏における現実的な問題として、サントゥールをはじめとする非西洋楽器の「音量」の問題がある。</p> <p>サロン的な小さい空間であれば、ピアノとサントゥールの相性は良いのだが(それでもピアノはかなりシビアな音量抑制を要求される)、広い空間で演奏すると、たちまちピアノの独壇場になってしまう。これ自体は想像に難くない現象なのであるが、ここから翻って、「音楽と距離」の哲学的考察の契機を得ることができた。つまり、西洋的鑑賞の作法と、東洋的没入の体験とは、その知覚のあり方からして相容れないものなのであるが、そこに楽器という物体の介在があるのであり、しかもその楽器自体が西洋性と東洋性を正しく体現している、という発見だ。西洋的理性の発達、コンサートホール巨大化、楽器の巨大化、大音量化を必要とした、と言い換えることもできるだろう。なればこそ、原始的な形態を維持し続けている中東の楽器に適した空間における音楽表現の追求が、ひいてはより根源的な音楽体験への誘いの一助となるであろうという推論は、決して妄言として一笑に付されてよいものではなく、しっかりとした意味を帯び始める。この点に関しては続けて研究してゆきたい。</p> <p>次に、歴史的、思想的背景を知ることの必要性を感じずにはいられなかった。</p> <p>自戒を込めていうが、私の知る限り音楽家は、自身の専門分野以外に対してとことん無関心な場合が多い。それが純粋な表現行為にとって良い影響がある場合もあるのだから、一概にそのこと自体を責めることはできない。知らなかったからこそできたことと、知らないとできないことのバランスはいつ何時も難しいものだ。</p> <p>今回に限って言えば、知らないことで遠回りをしてしまうことが多かった。</p> <p>この一年の勉強を通して、自身の無知を幾度恥じたことだろうか。楽器を卒なく演奏することは練習でいかようにも補えるが、あらゆる音楽に即した表現のあり方を探るには、楽譜を読んでいても何も始まらない。否、楽譜を解釈することが音楽表現に直結する、というこの思考のあり方こそが、一つの病であるとも言える。このような音楽における文書主義は、「書いていないことはわからない」という演奏家の愚鈍にさえ繋がってしまうのだろう。</p> <p>現在我々は、中世ヨーロッパ史、中世美術史、ルソー音楽論など一から学び直している。ペルシャ詩の原文読解にも挑戦し始めた。この学びがある程度の形となった時、ようやく見えてくる音楽もあるのだろう。</p> <p>以上2点を今後の大きな課題としつつ、これからの研究に邁進したい。</p>
--------------	--